新潟大学人文学部

学部だより

2026年 春（No.33）

新潟の芸者（新潟市観光協会発行パンフレット『新潟花街』（1960）14頁掲載）／中俣正義撮影／新潟大学にいがた地域映像アーカイブデータベースより

〈NEXUS 新潟大学キャンパスまるごとミュージアム〉
2026年２月より五十嵐キャンパス全体をミュージアムに見立てた新たなプロジェクトが始まりました。
人文学部からは、民俗、考古、地理、芸能論の４分野と、にいがた地域映像アーカイブが参加しています。
詳しくは、NEXUS特設サイトをご覧ください。➡

目　次

新学部長ご挨拶（山内 民博）…… 2
新潟大学キャンパスまるごとミュージアムNEXUS（田中 咲子）…… 3
吟遊詩人として生きる ―前田流平家琵琶を継承する相傳者の活動―（髙橋 秀樹）…… 4
哲学対話 ～丹治嘉彦氏の作品を囲んで～（阿部 ふく子）…… 5
FM-NIIGATA「NAMARA-MIX」に出演しました（小林　恵）…… 5
人文学部に新しく来られた方々 …… 6～7
人文学部を去られる方々 …… 8
2025年度人文学部 主なトピックス …… 8

新学部長ご挨拶

山内　民博

この４月から人文学部長を務めることになりました山内と申します。よろしくお願いいたします。

さて、早いもので21世紀に入って25年が過ぎ、今年は26年目を迎えました。今世紀の４分の１がもう経過したことになります。私などは子どもの頃には21世紀というのは遠い未来のことのように感じていたものですが、今の人文学部の学生たちはほとんど2001年以降に生まれた世代となっています。

この25年の間に人文学部もいろいろと変化してきました。5000人以上の学生たちが入学し、卒業していきました。教員も大幅に入れ替わりました。現在の教員の３分の２以上は2001年以降の着任ですし、昨年度から今年度にかけては９人の新しい教員を人文学部にむかえることができました。今号の後半では、その顔ぶれを（全員ではありませんが）紹介していますので、ご覧になってください。

学生たちが学ぶ仕組み、枠組みという面では、21世紀がはじまった頃の人文学部には３つの課程（行動科学、地域文化、情報文化）があり、その下にあわせて10の履修コースが置かれていました。課程ごとに入学定員があり、学生は３年生から（実質的には２年生からというところもありましたが）課程内の履修コースに分かれるという仕組みでした。

その後10年ほど経って、３課程を１学科にまとめるという、まずまず大がかりな枠組みの変更をおこないました。学生は人文学科に入学し、２年生から６つの主専攻プログラム（心理・人間学、地域・社会文化学、歴史文化学、日本･アジア言語文化学、西洋言語文化学、メディア・表現文化学）のうちの１つを選んで学ぶという形に変わりました。それまでに比べると、学生の入学後の選択の幅が広がったといえるでしょう。さらに近年では、この６主専攻プログラムを３つの学位プログラム（心理･人間学、社会文化学、言語文化学）に再編して、学生が自身の関心にあわせてより柔軟に学べる環境を整えています。

もちろん、枠組みだけでなく、中身の方も変化してきました。細かくは述べませんが、表現プロジェクト演習のような表現することに重点を置いた少人数授業の取り組みであったり、“デジタル”的なものを活用していく授業など、新設の科目もいろいろ登場してきました。2020年にはコロナ禍をきっかけにZoomなどを使った遠隔授業が一気に普及しました。現在は教室での対面授業を基本にする形に戻っていますが、遠隔授業でおこなわれることもあり、授業への学生の参加の仕方も多様になってきました。

学部を卒業した後に進む大学院にまで話を広げると、今年度から新潟大学には新しい大学院が誕生することになりました。これまで文系には現代社会文化研究科という大学院がありましたが（このほかに教職大学院もあります）、その現代社会文化研究科と理系の自然科学研究科を一つにして総合学術研究科ができます。さしあたり修士課程からのスタートとなりますが、文理融合型のプログラムなど、意欲的な試みがいろいろと盛りこまれているようです。

こうした変化のなかでも、変わらないもの、変えることなく積み重ねてきたものもまたあります。１年生には昔から英語に加えて初修外国語の授業がたくさんありましたし、大学での学習の基本を身につける１年生向け演習科目も以前からつづいています。現在は人文初年次演習という名前ですが、その科目が２年生の基礎演習、３年生・４年生の専門の演習とつながっていくわけです。人文学部では、この少人数の演習（ゼミ）を重視してきましたし､これからも引きつづきそうだろうと思います。

卒論（卒業論文）もずっと学部での学びの中核となるものでした。紙に印刷し表紙をつけて提出する形から、電子ファイルの提出にと形態は変化しましたが、４年生にとって締切（昔から１月10日です）までプレッシャーのかかる日々がつづくことは今も昔も同じです。同時に卒業論文を書くということ、自分で問いを立て、調べ、考え、表現するというプロセスが学生にとって貴重な経験であることも変わっていないようです。人文学部ではこの20年ほど、学生が卒業する時にカリキュラムに関するアンケートをとっているのですが、３・４年次のゼミと卒論は一貫して高い評価を得ています。

この先の25年を予測することなどもちろんできない話ですが、新潟大学と人文学部はこれからも新たな姿をみせていくことでしょう。ですが、どのように新しいものを取り入れ変化していくにせよ、人文学部が学生たちにとって、大学ならではの知に触れ、一人ひとりがそれぞれに成長することのできる場でありつづけるよう努めていきたいと思っています。

新潟大学キャンパスまるごとミュージアムNEXUS

田中　咲子

今年２月中旬から五十嵐キャンパス全体で「新潟大学キャンパスまるごとミュージアムNEXUS」プロジェクトが始まりました。もちろん人文学部もこの事業に参画しています。

このプロジェクトは、五十嵐キャンパス全体を一つのミュージアムに見立て、各学部や研究センターや施設が持つ既存の展示、あるいは新たに整備した展示を巡って頂くものです。学外の方々には新潟大学の研究教育活動の過去と現在をお伝えし、本学の魅力に触れて頂ければと考えております。そして、学内の方々には…いろいろな思いがあるのですが…、中でも、従来部局ごとに別々に紹介していた資料や新たに整備した展示資料を一つのネットワークの中に位置づけることによって、私たちの個々の研究教育活動を相対化し、新たな価値の発見や創出につなげたいという思いがあります。

本学では、2021年にユニバーシティ・ミュージアム（UM）構想という形で、いわゆる総合博物館実現に向けた動きが再開しています。今回のNEXUSは、その実現に向けて試行的に取り組む初めての事業です。私は2025年４月から本学旭町学術資料展示館館長として展示館の舵取りを担うとともに、展示館がUM構想の中で中核的な役割を果たす計画であることから、今回のNEXUSプロジェクトの旗振り役も務めることになりました。

このプロジェクトのアイディアが浮かんだのは去年の夏休み前頃だったでしょうか。展示館事務局に相当する附属図書館資料公開係の皆さんと素案を作り、各部局で展示に関わる先生方にお声をかけて９月初めに集まって頂きました。人文学部からは民俗学がご専門で且つ全学の学芸員課程を担っておられる山田祐紀先生、考古学の森貴教先生、地域映像アーカイブ研究センターを担当されている中村元先生と榎本千賀子先生に参加して頂いています。何度もミーティングを重ね、それぞれの展示案を持ち寄り、プロジェクト名を決定し、年が明け卒論提出やら学期末の成績評価やら入試やらで忙しい最中、各展示の準備が進められました。ちなみに、チラシやポスターやWEBで目にするメイン・ビジュアルのデザインは、本学教育学部美術科を卒業したデザイナーにお願いしました。宇宙ステーションがパイプで連結されている、昔のSF映画に出てくるような近未来的なイメージでとお伝えしたところ、サイケデリックで想像をはるかに超える素晴らしいデザインに仕上げて下さいました。

さて、わが人文学部ですが、二種類の展示でこのプロジェクトに大いなる貢献をしています。一つは人文展示室の展示、もう一つは地域映像アーカイブ研究センターとしての展示です。一方の人文展示室は、もとから展示室として機能してきましたが、今回NEXUSに合わせ、山田祐紀先生、森貴教先生のご尽力により展示替えが行われました。廊下に面した展示ケースに、民俗学、考古学の資料に加えて、地理学の堀健彦先生と芸能論の中本真人先生にご協力頂き、民俗、考古、地理、芸能という計４分野の資料の陳列が実現しました。人文学の中でも実際にフィールドに出ての活動が欠かせない領域の教育研究を伝える展示となっています。

他方、地域映像アーカイブ研究センターは、図書館ロビーに大型モニターを設置し、膨大な映像資料の中から一部を紹介しています。実はアーカイブの展示はこれだけにとどまりません。人文展示室で展示している民俗資料に関連する画像を、榎本先生がアーカイブから探し出し、展示室に掲示したQRコードからその画像にアクセスできるようにしてあります。同様の連携は、日本酒学センターの展示とも行っています。

また中村先生は、ご専門の日本近現代史の見地から、五泉市にある農学部の村松ステーションで長年使用されていたイギリス製の古いトラクターの資料的価値を見出され、農学部とともに調査を始められました。このトラクターはまだ展示には至っていませんが、今後、部局を跨いでの幅広い研究対象となり得るものと見込まれます。

NEXUSは2027年まで続く継続的なプロジェクトです。初年度は人文（地域映像アーカイブ研究センター含む）、教育、理、工、農の５学部と日本酒学センター、中央図書館が参加してこのプロジェクトが立ち上がりましたが、2026年度は旭町キャンパスも含めて参加組織の増加や展示の拡充を図るとともに、今回整えた展示を活用して、それぞれの資料やプロジェクト全体をより価値づけるような活動を行いたいと考えております。最終的なUMの実現を目指して努力する所存です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

NEXUS
新潟大学キャンパスまるごとミュージアム

吟遊詩人として生きる
―前田流平家琵琶を継承する相傳者の活動―

髙橋　秀樹

私は、西洋古代史や古典学、特に古代ギリシアや古代エジプトなどの歴史や文芸を専門としています。特に古代ギリシアの英雄叙事詩に大きな関心をもって研究をしてきました。それらはもともと歌われたものでしたが、残念ながら、現在では言葉と韻律だけが伝えられていて、演奏の実態は殆どわかりません。大切な神話や伝説、歴史などを歌物語にして語り継ぐ文化は世界中いたるところにありました。しかし、その実演については、古代ギリシアの叙事詩と同様、失われてしまったものが殆どのようです。ところが、日本の『平家物語』については、13世紀前半に生まれた演誦が現在に至るまで引き継がれています。伝説・歴史の演誦文化が現存する世界的に貴重な例として興味をもちました。

同僚の鈴木孝庸先生（十数年前に定年）が『平家物語』と平家琵琶を専門に研究しておられたので、2000年から鈴木先生に習うようになりました。さらに鈴木先生からの紹介により、鈴木先生の師匠だった橋本敏江先生（2016年御逝去）や館山宣昭先生にも師事してきました。現在、前田流平家琵琶相傳者（いわゆる免許皆伝）として活動しています。

平家琵琶は、平安時代末から鎌倉時代にかけての仏教音楽や雅楽の影響を強く受けた芸能です。現代の音楽の嗜好とはかなり異なる雰囲気のもので、聞き慣れないうちは、お経を聴いているような印象を受けます。ところが、耳に馴染んでくると、その音楽世界の情緒が独特で面白くてたまらなくなります。これは、何回か聴いて聞き慣れてこないとピンとこないことだと思うので、うまく言葉で説明できません。

また、物語が声によってゆっくりと進められていくことも大きな魅力だと思います。本で読んでいくと、自分のペースでどんどん先に進むことになりますが、平家琵琶で語り、聴く場合には、一文一文がゆっくりとした音で進んでいくことになります。そのゆっくりとしたペースに逆らわずに物語についていくと、さっさと読み進めているときには思いつかなかったり感じなかったりすることが次々と心に浮かんできます。それが物語から得る感動を深めているように思います。

これまで、あちこちから御依頼を受けて、新潟、青森、宮城、東京、愛知、山口で演誦活動を行ってきましたが、まとまった活動としては次のものがあります。

1　全60回による平家琵琶全200句弾き語り「平家琵琶貳佰句通語聽會」：１人の演誦者が物語順に全句演誦する（一部平家）催事として、江戸時代初期以降、記録されている限りでは、４人目の達成者となりました。１回２～３時間の演誦を毎週行い、令和５年11月21日に始めて令和７年４月15日に完結しました。

2　20日連続演誦による平家琵琶全200句弾き語り：1470年に卜一検校という琵琶法師が21日で『平家物語』全句を語ったという古記録があります。伝統技能が正しく継承されてきているなら、昔できたことは今でもできるはずと考えて挑戦しました。２～３時間の演誦を１日３回（午前の部、午後の部、宵の部）行い、令和７年６月26日から始めて７月15日に完結しました。結果的に555年ぶりに平家琵琶演誦記録を更新することになりました。

3　10日連続演誦による平家琵琶全200句弾き語り：上記の連続演誦が予想よりスムーズに達成できたので、伝承技法の限界はどれくらいだろうと気になりました。研究者の性、業でしょうか、挑戦せずにはいられず、令和７年11月26日から１日12時間を超える演誦を始めて、12月５日に全200句を終えました。

現代では、西洋音楽が世界的に普及して優勢な状況だと思いますが、知り合いの声楽家から聞いたところでは、西洋の声楽では、１曲が長くても５分程度、１人の声楽家の連続演奏時間は２時間程度が限界だそうです。平家琵琶の場合、長いものになると１句２時間を超えるものもあり、それだけで現代の音楽の常識を破るものですが、１日６～９時間20日連続の演誦や、１日12時間以上10日連続の演誦を可能ならしめる伝統技法は、日本の伝統芸能の世界的特異性を示すものだと思います。グローバル化の現代において、地域的個性の重要性は益々高まっていると思いますが、平家琵琶が継承してきた伝統的技法は世界的にみてもおもしろいものだと思います。

上記の１～３の活動は、新聞やテレビ局でその度に報道され、ニュースもYouTubeにアップされました。３については、讀賣新聞の２月８日の朝刊全国版で報道されました。またＮＨＫ『歴史探偵』「「ばけばけ」の世界を徹底調査！」（令和７年12月３日）では、再現ドラマに合わせて琵琶の演奏を行いました。この番組は、NHKワールドプレミアムとして海外でも放送されました。

今後の抱負ですが、現代では平家琵琶を聴く人も演誦する人も少ないので、できるだけ多くの方々に聴いていただきたいと思っています。定例の演誦会として、毎月第１、第３月曜日に「平家琵琶貳佰句通語聽會　第二期」を行っています。また、依頼があればどこにでも出かけてできるだけ対応したいと思っています。

平家琵琶演誦についての口伝や書伝（平家琵琶の指南書、評論書古文書）で伝えられている内容には、実態や実演方法がはっきりしない点も少なくありません。他の演誦者の方々の意見を聴きながら、実演によるこれらの解明に努めていきたいです。

哲学対話
～丹治嘉彦氏の作品を囲んで～

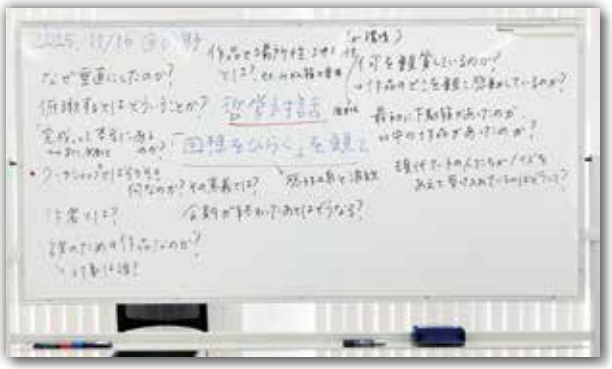
阿部 ふく子

丹治嘉彦作品展「回想をひらく」の会期中に、「哲学対話～丹治嘉彦氏の作品を囲んで～」と題して小さなワークショップが開催されました。

秋晴れの日曜の朝、展示会場となっている内野の古い倉庫に集合し、丹治氏のお話を伺いながら、「回想」をテーマにした作品を鑑賞しました。作品は円形の大きな立体物で、それを構成する一つ一つの小さな部分には、丹治氏が長年実践してきた美術教育のワークショップで子どもたちが制作した作品や、美術科の学生の作品が細やかに配置されていました。作品の素材には、使われなくなった下駄箱や棚など学校の記憶を宿す物が用いられていました。作品の全体像やコンセプトについて、詳しくは「丹治嘉彦展：回想をひらく　2～archive～」（旭町学術資料展示館、2026年１月31日～４月11日）をご覧いただきたく思います。内野の展示会場では、丹治氏が作品に込めた想いや、各部分にまつわる記憶を語り、参加者とのあいだで質疑応答も交わされました。

鑑賞後は、展示会場のすぐ近くの内野まちづくりセンターに移動し、哲学対話の時間としました。まずは各自の感想を共有することから始めて、鑑賞を通じて気になったことを思い思いに「問い」の形にしてもらいました（写真）。この日は特に、「ワークショップとはそもそも何なのか？その意義とは？」という問いについて、時間をかけて話し合いました。対話の内容はここでは紹介しきれないので省略します。

新潟で哲学対話の活動を始めて、気づけばちょうど10年が経ちました。理念となる「探究の共同体（Community of Inquiry）」と「知的安全性（Intellectual Safety）」の実現は難しく、毎回反省もありますが、実践しなければ出会えなかった言葉や考えがあり人々がいることに、いつでも新鮮な感覚をおぼえます。どんなテーマで対話をしても、探究の後には、いつもの言葉や概念が、語られた分だけ肌理のある意味をもって現れてくるところに、哲学対話の醍醐味はあると思っています。



FM-NIIGATA「NAMARA-MIX」に出演しました

小林　恵

2026年１月27日（火）にFM-NIIGATA「NAMARA-MIX」というラジオ番組に出演する機会をいただきました。江口歩さんとオダニハジメさんがパーソナリティーをされている番組で、毎回、新潟県内で活動をされているさまざまな方がゲストとして出演されています。今回、「10分間のお笑い授業」というコーナーにて発達心理学について話を、ということでオファーをいただきました。発達心理学と一口に言っても研究対象・内容は多岐に渡るため、専門である視覚の発達についてお話しさせていただきました。

当日は生放送の一発勝負。放送開始前に打ち合わせの時間もいただきましたが、実際に話す内容はその時次第というぶっつけ本番で大変緊張しました。しかし、いざコーナーが始まると、パーソナリティーの方々の軽快なトークと柔和なお人柄に緊張も解け、10分間があっという間でした。コーナー内では主に、乳児の視覚がどのように大人と異なるのかについてお話ししました。まず、視力の低さから薄くぼやけた世界が見えているため、白黒のようなコントラストのはっきりしたものが見やすく、薄く淡いものは見えにくいことをお話ししました。これを受け、パーソナリティーの方々から「むしろ乳児が大人に勝る面はあるか」という質問をいただきました。例として、大人では識別が難しい見慣れない文化圏の人物の顔やヒト以外の動物種（サルやヒツジなど）の顔でも、生後６ヶ月ごろまでの乳児は識別できるという研究をご紹介しました。

充実した時間であった一方で、「もっとこう話せばよかった」という後悔の念が残る部分もあります。特に、端的かつ平易な言葉で分かりやすく話すという点は意識して臨んだのですが、いざ会話の中で実現するのはなかなか難しく、自らの経験の浅さを痛感することになりました。そのような中でも、赤ちゃん特有の視覚世界に驚き、興味を持ってくださるSNS投稿を拝見することもでき、一般の方々に向けて研究についてお話しする機会の重要さを改めて実感しました。“赤ちゃんだけが”見えている世界に、少しでも目を向けていただける機会になったのなら望外の喜びです。実は出演に至ったきっかけは、オダニさんと親交のある人文学部の学生さんからの紹介でした。人文学部が繋いでくださったご縁と貴重な機会に、心より感謝申し上げます。

◇人文学部に新しく来られた方々

太田 凌嘉

2025年４月に新潟大学人文社会科学系の教員（スイングバイ・プログラム５期生）として着任しました。私は、折れ尺から加速器まで、問題解決に最適なツールを適用して身近な自然環境の豊かさを探究しています。わかりやすい数値や指標でしかものごとを評価できない方もおられますが、新潟大学は地理情報システム（GIS）のアカデミックライセンスを取得しているなど、真に恵まれた研究・学修環境を提供しています。私はGISを活かしつつも、丹念に現地を踏査し、物事の本質を明らかにしていく地理学を志向して人文学部での教育研究に従事します。

世の中は行く先なにかと不確実性を伴うものだと盛んに言うようになりましたが、私たちは、闇雲に不安を煽るだけでなく、近未来に自分の身の回りで起きうる問題を我が事として捉え、冷静に対処してゆかなければなりません。これからの社会を生き抜くのに必須となる心構えは、私が在籍していた京都大学防災研究所が提唱する「未災」という和語に集約されます。二番煎じでは味気ありません。伝統を大切にしつつも、型に嵌め込みすぎず、必要と疑問を糧として、自由闊達に、ブルーオーシャンを開拓してゆきましょう。よろしくお願いいたします。

畔柳 千明

2025年、言語文化学プログラムの准教授として着任しました。ロシア文学・文化の授業を準備しつつ、研究対象である中国・北京のロシア人居留地の歴史を繙きつつ思うのは、「言語文化」を学ぶ視野は、ある特定の分野や地域にとどまらず、より広く開かざるをえないのではないか、ということです。渡辺浩『たとえば「自由」はリバティか』（2025）は日本の例に即して「公」という語の歴史を議論していますが、19世紀北京のロシア人にも同様の問題を考えていた人がいました。作成された中国語訳のひとつ「信経」（いわゆる「信仰告白」）に「我信惟一聖而公宗徒教会（我信ず、惟一の聖にして公なる宗徒の教会を）」の一節があり、「公」はスラヴ語で「ソボールヌイ」に相当します。歴史的にこの「ソボールヌイ」には〈空間的に広がっている〉〈集め（ま）る〉の両義があり、特に19世紀ロシアで、語の定義について活発に議論がなされたことがよく知られます。「ソボールヌイ」の訳語としてやや後者に近い「公（中国語で〈集団の〉）」が採用されたことは、19世紀のロシア人のイメージを伝える手がかりと言えましょう。

「ロシア言語文化」「ロシア」とは何か？　その問いは結局、国としてのロシアの枠を超えた視野の下へ、われわれを運んでくれると信じています。学生の皆さんが視野を広げるきっかけを作れるよう、及ばずながら努めたいと思っています。

須田 悠基

2025年４月に新潟大学人文学部に助教として着任しました。現在は「倫理学概説」「倫理学研究A･B」「倫理学演習」といった倫理学関連の専門科目と、初年次向けの演習科目の授業を担当しています。出身は神奈川県で、学生時代からポスドクとして勤務していた時期まで、在籍していた研究機関はいずれも東京都でした。これまでずっと関東の比較的温かい地域で暮らしてきたので、新潟の冬はやはり少し寒いと感じます。ですが、とても暖かい防寒着とスノーブーツを新調したので、冬も快適に過ごせています。

私の専門は分析哲学と呼ばれる分野に属すもので、その中でも特に、真理論・認識論・メタ倫理にまつわる諸問題にこれまで取り組んできました。分析哲学の特徴の１つは、〈ある主張がどのような前提によって支えられているのかを分析し、その前提の妥当性を検討する〉という作業を重視する点にあります。また、その過程をできる限り明晰にし、誰もが理解できる形で提示することもこの分野では重要とされます。私自身も、そうした分野の研究者として、あらゆる専攻のひとに開かれた明晰な研究・授業を心掛けていきたいと思っています。これからどうぞよろしくお願いいたします。

安田　将

こんにちは、安田将です。2025年４月より心理・人間学プログラム（西洋哲学史分野）の教員として

働いております。私はこれまで、西洋古代から初期中世にかかる時期にギリシア語やラテン語で書かれた哲学的なテキストを対象とする研究を行ってきました。本学においては、これらの古典語の文法および哲学史の講義、ならびに文献講読演習を担当しております。この挨拶文は、着任よりおよそ一年を経た時期に書いています。

研究においては、文献が示す哲学的散文について、正確な文法理解にもとづいてよい内容理解を持つことを心がけています。加えて、当の文章を書いた（もしくは議論が報告されている）人について考えることや、異なる時代の文献においては同じ主題が異なる仕方で取り組まれていること（その隔たり）を意識して読むことをも心がけているように思います。このうち第一の心がけは、私を教えた幾人かの教師から学んだ伝統と言えるでしょう。

教育において、よい読み手を育てることをめざしています。そのためにまず、哲学的な文章のよりよい解釈を模索する基礎的な経験を学生が持つことを個々の授業において心がけています。さまざまな哲学的な問いを人びとがどのように発してきたかを知り、自身の目前にあるその一文をよりよく解釈するための労をとる――これらの作業の先において、過去の文献のよい読み手となった学生が、新たに問いはじめることが可能となると考えています。

山田 斗志希

大学院修了後、大学の情報基盤・広報部門でWebの管理・運用に携わる一方、高専では非常勤講師として美術を担当しました。その後、専門学校デザイン学科の専任教員を経て、放課後等デイサービスで子どもたちと過ごしていました。この間、実務の傍ら研究を続けてきました。ご縁があり、2025年４月に助教として着任しました。

研究の基底には、ことばや表現が、どの場面でどう用いられ、どのような作用をもたらすのかというプロセスへの関心があります。大学院時代、悪役250体分のセリフを収集し途方に暮れていたとき、計量テキスト分析（テキストマイニング）に出会いました。以来、これを軸に、フィクション／ノンフィクションを問わず、〈物語る〉行為が形成する文化を、量・質の両面から研究しています。最近は物語論と組み合わせ、翻案に関する論考もまとめました。加えて、授業の学習ログを活用し、学びのプロセス分析にも取り組んでいます。

「専門は○○です」と一言で言い切れない者ですが、これまでの経験とこれからの出会いが、おのずと私の専門性を形作っていくのだと思います。「人間が何をしているのか」という根源的な問いを大切にしながら、私らしく教育と研究に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

山田 祐紀

2025年４月に社会文化学主専攻プログラム（民俗学・博物館学分野）の准教授として着任しました。

出身は新潟大学五十嵐キャンパス近くの新潟市西区内野町です。小学生の頃とほぼ変わらない、そして大学生の頃とまったく同じ経路で通勤することに、不思議な感覚になる日々です。

専門は日本民俗学で、特に村落における土地に関わる慣行を研究しています。フィールドは主に新潟県内です。権利や義務、人びとの感情が複雑に絡み合う中で、なぜその慣行を実施してきたのか、あるいはその慣行が終焉したのはなぜなのかを、フィールドワークを基軸に文献史料も用いながら探っています。

また、前職、前々職ともに学芸員であったことから、博物館学も担当しており、学芸員資格取得に係る講義や実習に携わっています。総合大学である新潟大学は、豊かな専門性を有し、同時にさまざまな学術資料も所蔵しています。そうした専門性や資料は、既に学部ごとの展示室等で発信されていますが、学芸員関係の勤務経験や講義・実習を通して、大学の魅力や学生のみなさんの専門性をいっそう深め、伝えるお手伝いができればと考えています。

着任からまもなく１年を迎えるなか、さまざまな業務に慣れることに未だ精一杯ではありますが、専門である民俗学や博物館学を通して、学生のみなさんとともに学び、人文学部の一員としての役割を果たすよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

◇人文学部を去られる方々

牧野 由佳

一年半という短い期間でしたが、在任中は先生方や職員の皆さまに大変お世話になりました。着任直後は予期せぬ人事の変動もあり、十分な引継ぎができないまま業務に向き合うことも少なくなく、戸惑う場面もありました。それでも、周囲の皆さまに支えていただき、大きなミスなく務めることができましたこと、改めて感謝申し上げます。また、着任時から温かく迎え入れてくださった先生方のお心遣いにも励まされました。

在任中でとりわけ心を動かされたのは、学生が課題に真剣に向き合い、試行錯誤を重ねながら成長していく姿に触れられたことです。着任当初は教育に大きな期待は抱いていませんでしたが、素直で誠実に学びへ向かう新大の学生たちと向き合う中で、私自身も多くを学ばせていただきました。教えることの意味を改めて考える機会となり、こうした経験は何よりの幸福でした。

民俗学実習では、新潟市北区松浜地区での民俗調査を一年かけて行い、地域の生活や土地への思い等に触れることができました。また、二年生向けの実習では、鈴木牧之の『北越雪譜』にも描かれる魚沼市堀之内の「花水祝」を学生たちと見学し、地域の方々から多くのお話を伺いました（写真はその時にいただいた「鳩飾り」で、繭玉の白い団子状の部分を鳩の形に成形してあります）。

この他、佐渡学セミナーを契機に訪れた佐渡では、正月行事などを見学しましたが、もっとも盛んな春祭りとその際の芸能を調査できないまま離任することとなり、いつか改めて訪れたいと感じています。

在任中にいただいた学びを胸に、新たな環境でも研究教育に努めてまいります。皆さまに感謝申し上げるとともに、人文学部の今後ますますの発展をお祈りいたします。

廣部 俊也

2026年３月９日に廣部俊也先生のご退職を記念して、退職記念談話会が開催されました。

日時：2026年３月９日（月）14：30～16：00
場所：新潟大学五十嵐キャンパス総合教育研究棟（B255教室）
内容：「廣部先生のご紹介」（教員とゼミ生より）
「廣部先生のお話」
題目〈戯作はやはり文学ではない〉
「花束贈呈」（学生一同）
「交流会」

談話会後は松風会館にて祝賀会が行われました。

どちらも、在学生や教員に加えて多数の卒業生が参加し、盛会に終わりました（文責　山田斗志希）。

2025年度人文学部　主なトピックス

４月 15日	髙橋秀樹教授の演誦による「『平家物語』全編を聴く会」が最終回を迎える
６月 21日	新潟大学人文学部・佐渡市教育委員会連携協定事業「第14回佐渡学セミナー」開催
10月 26日	「開講！新潟大学@古町ルフル」にて新美亮輔准教授による模擬講義「私たちは『マイノリティがいる確率』を考えるのが苦手 ―認知心理学でわかること―」開催
10月 25日	中本真人准教授『中田みづほの百句』（ふらんす堂）刊行
11月 １日	新潟大学人文社会科学系附置 地域映像アーカイブ研究センター イベント「花街の記憶を残し隊」開催
11月 ２日	新潟大学人文学部・佐渡市教育委員会連携協定事業シンポジウム「折口信夫・池田弥三郎の見た佐渡」開催
11月 ８日	伊藤嘉高准教授「日本都市学会賞（奥井記念賞）」受賞
11月 16日	新潟大学人文社会科学系附置 芸術型思考研究開発ステーション イベント「哲学対話～丹治嘉彦氏の作品を囲んで～」開催
11月 23日	第13回歴史地震史料研究会を開催
12月 ６日	第47回 新潟哲学思想セミナー（NiiPhiS）を開催
１月 11日	新潟大学人文社会科学系附置 地域映像アーカイブ研究センター 展覧会「さざめく往来　古町花街に行き交う人びと」開催 （新潟大学駅南キャンパスときめいと多目的スペース）
１月 27日	小林恵准教授がFM-NIIGATA「NAMARA-MIX」に出演
２月 22日	第４回新潟国際アニメーション映画祭に人文学部生が参加
２月 26日	荒井歩実さん（人文学部卒業生）・横山仁史助教・小林恵准教授 「日本心理学会学術大会優秀発表賞」受賞

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。